

私は社会福祉事務所の就労支援員として仕事をしている。支援している対象の方の多くはそれぞれにドラマチックな人生を生きしており、支援の中で、その方の人生の転機に立ち会うことが度々ある。7月のこの欄で二つの事例を紹介した。今回また新たな事例を紹介することにした。前回同様、守秘義務

ナビゲーター

の関係上これまでのいくつもの経験をフィクションとして再構成して記述する。

Dさん。支援開始当時63歳。男性。日雇いの建築業で収入を得て生活してきたという。60歳を過ぎた頃から仕事に就けないことが続いて生活に窮し、生活保護開始となった。「オレは好きなようにやってきたから、後は

36

産業カウンセラーの現場から

相談者の思いに共感して伴走する

「転移感情」を生かして

どうなったっていいんだ」。就労支援を開始したころ、Dさんはそんなことを言っていた。

社会福祉事務所には就労支援コーナーというハローワークの窓口が設置されていて、私たち就労支援員とコーナーのハローワークナビゲーター（以下「ナビ」と記す）が連携して支援することが多い。Dさんについても、週1回1時間コーナーのEナビ（当時の42歳、女性）のナビゲートを受けていただくようにした。

ナビゲートを重ねるうちに、Dさんに変化が現れた。ずいぶん上品な身なりをしてくる

人生の最後に花

ようになった。消しゴムやお菓子やらを持ってきては、Eナビに渡そうとする。DさんはEナビに恋愛感情を抱くようになっていったのだ。実はDさんは母のいない環境で育っている。無意識的な愛情欲求が支援者であるEナビに向けられたのだと考えられる。こう

した反応は「転移」といって支援の中ではしばしば起こることがある。Eナビは経験、知識の豊富な支援者であったし、私との連携の中で検討も充分できたので、転移を生かす支援を展開することができた。そうした中で、Dさんは就労する意味を理解し、またEナビに評価されたいという気持ちも動機となっ

て、積極的に就労活動をし、清掃の仕事に就くことができた。それから月1回Eナビのフォローを受けながら、仕事を続けていた。

しかし67歳の時、脳梗塞で入院。半年ほどしてから担当地区のケースワーカーに状況を聞くと、「心配ないですよ。担当の理学療法士の女性にほれてリハビリ張り切っちゃって、もうすぐ退院して自宅に戻れそうです」。

Dさんは70歳で亡くなった。人生の最後の方には少し花が咲いていたように、私には勝手ながら感じられる。

【日本産業カウンセラー協会中部支部講師、社会福祉事務所就労支援員、産業カウンセラー・公認心理師・二級キャリアコンサルタント 渡辺英明】

（火曜日に掲載）

